

研究・調査報告書

報告書番号	担当
8	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
Average volume of alcohol consumed, type of beverage, drinking pattern and the risk of death from all causes. 平均アルコール摂取量、アルコール飲料の種類、飲酒回数と総死亡リスク	
執筆者	
Baglietto L, English DR, Hopper JL, Powles J, Giles GG.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Alcohol Alcohol. 2006 Nov-Dec;41(6):664-71.	
キーワード	
総死亡、飲酒回数、飲酒量、コホート研究	
要 旨	
<p>背景： 軽度～中等度の飲酒は死亡のリスクを低下させ、大量飲酒は増大させることが種々の研究で明らかにされている。</p> <p>目的： 本研究では、平均アルコール摂取量・アルコール飲料の種類・飲酒回数と総死亡リスクとの関連を検討した。</p> <p>方法： 平均アルコール摂取量とアルコール飲料の種類はアルコール飲料の種類別の摂取頻度および一回あたりの摂取量に関する調査票から推定された。また、飲酒回数は1週間の飲酒記録から評定された。36984名の対象者の追跡期間中(平均追跡年数:10.5年)1971名の死亡が確認された。</p> <p>結果： 男女とも、アルコール摂取量と総死亡リスクとの間にはJカーブ減少が認められた。最も総死亡リスクが低いのは一日アルコール摂取量が9-12gの群であり、総死亡に対して予防的に作用するアルコール摂取量の上限は一日あたり42-76g群であった。ワインの摂取は総死亡リスクを低減させており、男性では一日あたりのアルコール摂取量が20-39gの群でハザード比が最も低く(ハザード比:0.69、95%信頼区間:0.54-0.87)、女性では1-19g群で最も低かった(ハザード比:0.82、95%信頼区間:0.70-0.98)。ビール摂取は、男性においては総死亡リスクの上昇と関連していたが(p for trend=0.05)、女性ではその関連は見出されなかった。アルコール消費量を調整したうえで、飲酒回数と総死亡リスクとの関連を検討したところ、飲酒回数が多いほど総死亡リスクは低かった(p for trend=0.04)。</p> <p>結論： 本研究では、これまでの研究で指摘されていたアルコール摂取量およびアルコール飲料の種類と総死亡リスクとの関連が確認された。さらに、飲酒回数が総死亡の独立した危険因子である可能性が指摘された。</p>	